

北周墓誌の粟特語(ソグド語)音訳漢字

吉池孝一

1. はじめに

この墓誌は、北周大象二年(580年)、後に有力となる唐代長安音の行われた地域のものである。ソグド人名の音訳漢字を僅かに含んでいる。利用できた音訳漢字名は5つであり、このような僅かな資料によって論ずることは大胆に過ぎるのであるが、この墓誌には幾つかなの特異な価値が認められる。すなわち、『切韻』とほぼ同時代の音韻資料であり、地域が特定されている。反切などとは異なり、直接漢語音を示す資料でもある。しかも、変形を被ったかもしれない伝世の資料ではなく同時代の出土資料である。このような価値を考慮し、含まれる音訳漢字は僅かであるが、あえてここに取り上げたしだいである。

2. 資料

さて、陝西省西安市ソグド人墓から出土した墓誌の拓本が古代文字資料館にある¹。右側にソグド文32行、左側に漢文18行があり、漢文の1行目には篆書体で「大周□州□保史君石堂」(□は欠落部分)とある。「史君」と称されるソグド人が妻とともに北周大象二年(580)に合葬されたこと等が記されている。なお、「石堂」とは家屋を模した石棺である。詳しくは西安市文物保護考古所2005を参照願いたい²。その31-32頁にはソグド語のローマ字翻字と漢文の翻字があり、若干のソグド人名とその漢字表記が対応している。それをそのまま書き出し、子音につき対応すると思われる文字に下線を付すと次のとおりである。

- ・ソグド文 9行「r š t β n t k」と漢文5-6行「阿史盤陀」
- ・ソグド文 9行「w n ' w k」と漢文6行「阿奴伽」
- ・ソグド文30行「β r ' y š m n β n t k」と漢文17行「毗沙」
- ・ソグド文30行「δ r y m t β n t k」と漢文17行「維摩」
- ・ソグド文31行「p r ' w t β n t k」と漢文17行「富□多」

¹ 拓本はサイト「古代文字資料館」よって確認することができる。

² 西安市文物保護考古所2005, 4-32頁。

いまこれを拓本により確認する（文末の図参照）。

阿史盤陀の三字目の字形を見ると盤とはいささか異なるが、対応するソグド文字が **B** もしくは **Bn** であることを考え合わせるならば盤を意図した文字として大過ない。四字目は陀の異体字隋である。毗沙の一字目は一部分が見えないけれども毗を意図したものに相違ない。二字目を見ると、彡があり、さらに傍の下部には「ノ」らしきものはあるけれども、欠落が多く沙であることの確認は困難である。あるいは原石を参照するならば沙と比定することができるのかもしれないが、ここでは参考程度の資料として[]を付して[沙]としておく。維摩については、その一字目の傍に隹らしきものが見えるけれども拓本による限り維であることの確認は困難であり[維]としておく。富□多の二字目は不明である。三字目も多とするには躊躇をおぼえる。やはり[多]としておく。

3. 資料の質

ここで得られたソグド人名の阿史盤陀、阿奴伽、毗[沙]、[維]摩、富□[多]のうち後三者にはやや問題がある。毗[沙]、[維]摩、富□[多]は墓主である史君の子なのであるが、そのうち毗[沙]と[維]摩をそのまま毗沙と維摩に読んで良いとしたならば、これは漢訳仏典中の固有名の毘沙門天と維摩詰を利用したものかもしれない。西安市文物保護考古所 2005 の写真によると石棺の正面にあたる南壁にはゾロアスター教の拝火壇のレリーフがあるけれども、西壁のレリーフでは光背を負い頭頂に肉髻のある人物が蓮華の台座に座して説法をしている如くであり、周囲の人物は合掌している。この光背肉髻の人物を西安市文物保護考古所 2005 は「神像」とするけれども³、これは仏陀に相違なく、この墓を作った子供たちの名が仏教に関わりがあるとしても、それほどとっぴなことではない⁴。富□[多]もそれに類するものであるかもしれない。そうであるならば、音声の類似は多少犠牲にしてでも有意味な漢字を当てた

³ 「画面上部分中心位置有一交脚盤坐於蓮華宝座上的神像，身后有橢圓形背光。該神頭挽小髻，面有髭須，右臂彎曲上舉，右手小拇指上翹，左臂微曲，左手置於胸前，袒右肩，帔帛搭於左肩上，似在講經說法。」（10 頁）

⁴ なお、吉田豊 1996 によると、6 世紀後半から 8 世紀にかけてのトルファン出土漢文文書中のソグド人名につき、「浮伽 = pwty[buti] 『仏陀』を含む名前は唐代以降の文書にしか現れず、彼らが何時仏教徒になったかについて示唆を与える。」（51 頁）とあるのは興味深い。

可能性があり、この三者については漢字音の資料としての価値は一段低いものとなってしまふ。そこで、この三者には*を付し他と区別する。

更に重要なこととして、この音訳漢字が、ソグド語を母語とする立場から作られたものか、それとも漢語を母語とする立場から作られたものかという問題がある。この問題には母語以外の言語の習熟度も関わってくる。ソグド人でも漢人でもない架空の第三者の立場から現実の音訳を論ずるわけにはいかないし、ソグド人と漢人の立場を混在させるわけにもいかないのである。このような問題は、音訳漢字の資料が多い場合はその分析を通して浮かび上がらせることもできるのであるが、当該墓誌のように資料が少ない場合はそういうわけにはいかない。西安市文物保護考古所 2005 によると、この漢文には多くの異体字や誤字があり、文字の書写も規範的でないことから、漢字に習熟していないソグド人によって書かれたものではなかろうかということであるが⁵、たとえその通りであったとしても、名前の漢字表記は即席に作られたものではなく習慣的に使われていたものであろうから、この点より直ちに漢字への音訳がソグド人によるとするわけにはいかない。

もっとも、実践としては、先ずはソグド人の立場から音訳の是非を考え、しかるのちに漢人の立場からそれを検証してみるということをするしかないであろう。

4. ソグド語の音韻

そこで先ず、議論の前提となるソグド語の音韻体系とそれを表記する文字を Sims-Williams, N. 1981 によって確認すると次の通りである。

音韻						文字				
p	t	(ts)	č	k		p	t	c	c	k
(b)	(d)	(dz)	(j)	(g)		p	t	c	c	k
f	θ	s	š	x	←	p/β	δ	s	š	x
β	δ	z	ž	γ		β	δ	z	z	γ
m		n				m		n		
w	(l)	r	y	(h)		w	δ/r	r	y	x

⁵ 「有許多別字和錯字，文字書寫也極不規範，可能是一位不甚熟悉漢字的粟特人書寫的。」(23 頁)。

表中の（ ）は異音および周辺の音韻であるという⁶。また、有声破裂音の[b][d][g]は、外国語音の表記として現れるほか、鼻母音(ソグド文字 n で表記される)の後に/p//t//k/の異音としても現れるという。さらに、やや時代が下った写本では、/p//t//k/は、有声子音や母音など各種有声音に後続する場合も、やはり有声化するという傾向が見られるという⁷。

これ以降、Sims-Williams, N. 1981 のソグド語音韻論についての解釈によるのであるが、正直なところ、それを評価する知識はわたしにはない。とくに有声の破裂音や破擦音が、音韻として確立していたのかそれとも音声的な異音に過ぎなかったのかということについて釈然としないが、ここでは音声的な異音であるとして話を進めざるを得ない。誤解のある分にはお教え頂けたら幸いである。

なお、漢語中古音の子音一覧表については、各種研究書および概説書に言及されており、何れを参照しても議論に影響を与えることはないと考えるので省略する。

5. ソグド文字と音訳漢字

この墓誌(580年)は、隋の仁寿元年(601年)に編定された『切韻』とほぼ同時代に成る。しかもこれは、西安出土であるから後に有力となる唐代長安音の行われた地域のものでもある。このことより、その音系に唐代長安音の特徴を見ることができると否かという点に関心が向く。そこで、ソグド文字と音訳漢字の対応のうち、漢字の声母(音節初頭子音)に関わるものを抜き出して提示すると次のようになる。

ソグド文字と音韻		音訳漢字
β(/β/, /f/)	←	盤(並母・平声) *毗(並母・平声)

6 “The table includes (in parentheses) some allophones and marginal phonemes.” p.352.

7 “On the other hand, only the Man. script represents the voiced plosives [b,d,g] by a distinct series of letters. From the distribution of these letters it would appear that the voiced plosives normally occurred only in foreign words and after the vocalic nasal /m/ as allophones of /p,t,k/, though there is evidence in some late (chiefly Chr.) MSS of a more general tendency to voice any plosive which is preceded by a voiced sound.” p.352-353.

/m/は文字 n で表記され、前に接する母音と同一の鼻母音となる。例えば/am/は[aã]。なお、印刷の都合で/m/としたが原文では m の上にドットを付す。

p(/p/, [b])	←	*富 (非母・去声)
t(/t/, [d])	←	隋 (定母・平声) * [多] (端母・平声)
k(/k/, [g])	←	伽 (群母・平声)
n(/n/)	←	奴 (泥母・平声)
m(/m/)	←	*摩 (明母・平声)
š(/š /)	←	史 (生母・上声) * [沙] (生母・平声)
δ (/ δ /, /θ /)	←	* [維] (以母・平声)

ここには、重唇音の軽唇音化の有無、有声破裂音の無声化の有無、鼻母音の非鼻音化の有無など幾つか問題がある。そのうち小稿では重唇音の軽唇音化の有無についてのみ述べる。それ以外の項目については、いろいろ検討した結果、今のところ確実なことはなにも分からないので省略することにした。

6. 重唇音の軽唇音化の有無(1)

まず、ソグド文字 **B** に盤 (並母・平声、中古/b/) と*毗 (並母・平声、中古/b/) が当てられることに就いて考えてみたい。これは重唇音 (中古/p//b/など) の軽唇音化 (/f//v/など) の有無に関わってくる。さて、Sims-Williams, N. 1981 によると、ソグド文字 **B** はソグド語の/B/と/f/を表す⁸。この文字 **B** が摩擦音に対応するということにつき、参考までにやや時代が下ったものではあるが、吉田豊 1994 により、漢語西北方言音をソグド文字で表記したとされる資料 T II T (7世紀中ごろから8世紀中ごろの資料であるという) をみると次のとおりである。

謗 p'nk 不 pr (以上幫母)
 怖 pw (以上滂母)
 薄 p'x 菩 pw (以上並母)
 誹 By 方 B'y nk (以上非母)
 佛 Br (以上奉母)

これによると、軽唇音化したと想定される非・奉母は、ソグド文字 **B** で表記されている。

今問題にしている墓誌では、これと同じソグド文字 **B** (摩擦音

⁸ もっとも/f/は文字 **B** もしくは文字 **p** に補助記号を付して表記する場合もあるようだ。“A diacritic is sometimes used to differentiate /f/ from / B / and /p/.” p.348.

/β/or/f/) を、盤（並母・平声、中古/b/) と*毗（並母・平声、中古/b/) で表記する。なお、音訳漢字として利用された盤と*毗は現在にいたるまで通常は両唇破裂音であり、唇齒音となることはない。以上を要するに、ソグド語の摩擦音に漢語の破裂音を当てているわけであるが、これは何を語っているのであろうか。

ソグド語を母語とする者の立場からすれば、ソグド語に唇摩擦音の/β//f/という音韻があるわけであるから、ソグド文字 β で表記されるソグド語/β//f/を漢語で音訳する場合、もしも漢語に軽唇音の[f, v]などが発生していれば、その軽唇音を当てるが道理である。しかるに、この墓誌では、重唇音すなわち両唇破裂音をあてるわけであるから、音声として、漢語に適切な軽唇音[f, v]などはなかったと考えて良いのであろう。

これを、漢語を母語とする者の立場から見た場合、軽唇音が口先で起こる音声的な異音の[f][v]などとしてではなく、明瞭に認識し意識的に運用し得る音韻の/f//v/などとして確立していたか否かが問題となる。もしも漢語に音韻/f//v/などが無かったとするならば、ソグド文字 β で表記されるソグド語/β//f/には、漢語音韻の/p//b/などが当てられることになるであろう。いっぽう、もしも漢語に音韻/f//v/などが有ったとしたならば、当然それが当てられたはずである。したがって、漢語を母語とする者の立場から見た場合、ソグド文字 β（摩擦音/β/or/f/) に両唇破裂音が当てられた事実は、音韻として漢語に軽唇音が確立していなかったことを示すとみて良いのであろう。

7. 重唇音の軽唇音化の有無(2)

つぎに、ソグド文字 p に*富（非母・去声。中古音では/p/とされるが後に/f/となる）が当てられることに就いて考えてみたい。Sims-Williams, N. 1981 によると、ソグド語には/p/と/f/の音韻的な区別があり、文字 p はソグド語の/p/もしくは/f/を表す⁹。当該墓誌では文字 p に*富を当てるわけであるが、文字 p が、/p/であったか、あるいは/f/であったか問題となる。西安市文物保護考古所 2005 は、問題の文字 p

⁹ 先に述べたように/f/は文字 β もしくは文字 p に補助記号を付して表記する場合もある。

を含む $pr'wt\beta nt k$ という文字列を Frötvantak と転写するから /f/ であつたと考えているようだ。これが何によるものかは分からないが¹⁰、もしもソグド語の /f/ に *富 (後に /f/ となる) を当てたとすると、これは軽唇音化は無いとする前節の議論にとって不都合のように見えるけれども必ずしもそうではない。

先にソグド語を母語とする者の立場から見た場合、音声として、漢語に適当な軽唇音すなわち唇歯音は無かつたと言えらした。そうであるならば、ソグド語が /p/ であろうと /f/ であろうと、漢語に軽唇音が無いのであるから、漢語の /p-/ を当てるしかない。あるいは /hu-/ など曉母合口の漢字を当てるなどの工夫を凝らすかもしれない。ここでは、*富を当てたのであるが、これは軽唇音化を起こしていない重唇音の *富を当てたと考えて不都合はない。

先に漢語を母語とする者の立場から見た場合、音韻として漢語に軽唇音が確立していなかつたと言えらした。そうであるならば、ソグド語が /p/ であろうと /f/ であろうとそれを明瞭に認識し分けるのは困難であろうし、なによりも漢語に音韻として軽唇音が確立していないのであるから、漢語の /p-/ (口先でおこる音声的な異音として [f, v] などが発生する傾向にあつた場合それも含む) を当てることになる。あるいはソグド語の /f/ を誤認し、漢語の /hu-/ など曉母合口の漢字を当てるかもしれない。ここでは、*富を当てたのであるが、これは軽唇音を当てることを意図したものではなく偶然の産物であるということになる。

8. おわりに

これらの僅かな音訳漢字は当時の漢字音につき確実なことは何も語らないが、重唇音 (/p//b/ など) の軽唇音化 (/f//v/ など) は未だ起こっていないのではないかと想像させる部分がわずかながらあつた。これは一見あたりまえなことのようにであるが、河野六郎 1937 の『玉篇』(543年成書)の研究によると、六朝の南方方言にあつては既に軽唇音化がみられるというから、同時期における北方の音訳資料の状況は気になると

¹⁰ 「分からない」とはこういうことである。vantak は「～(の)しもべ」というほどの意味であるから、その前の Fröt は何らかの神聖なものを表すソグド語であるはずだ。それが音形を含めて既に比定されているかどうか寡聞にして知らないということである。当然のことながら漢字音のほうから /f/ とするわけにはいかない。

ころである。

〈参考文献〉

Sims-Williams, N. 1981. "The Sogdian sound-system and the origins of the Uyghur script" , *Journal Asiatique* 269:347-360(Paris).

西安市文物保護考古所 2005. 「西安北周涼州薩保史君墓發掘簡報」, 『文物』2005年 第3期, 4-32頁。

河野六郎 1937. 「玉篇に現れたる反切の音韻論的研究」, 『河野六郎著作集』第2卷 (平凡社, 1979年, 4-154頁) 所収。

吉田 豊 1994. 「ソグド文字で表記された漢字音」, 『東方学報』京都第66冊, 380-271頁。

吉田 豊 1996. 「ソグド語とソグド人」, 『月刊 言語』Vol. 25, 48-54頁。



r š t β n t k

←

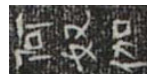


阿史盤陀



w n ' w k

←



阿奴伽



β r ' y š m n β n t k

←



毗[沙]



δ r y m t β n t k

←



[維]摩



pr ' w t β n t k

←



富口[多]